

## 五山文學の時代的背景とその特質

滿 井 賢 至

### 一

文字そのものの發生乃至存在は單なる記號としてでしかなかつたかもしれない。而し文學はそうではなかつた。零を幾度重ねても零に過ぎない。而し點の軌跡は一本の線であり得た。單に方法として使用された時、文字は記號であり、一種の道具であつた。記號たる文字が藝術として伸張するには如何なる條件が必要とされるか。文學乃至文藝の定義はその觀點によつて種々の結論が導き出されてゐる。而し今、一般的常識に於て文藝は單なる道具としての文字の羅列ではない。即ち文藝は一個の世界を創造する永遠に古くして永遠に新しき綜合的生命體である。

生命體である爲への條件として文學は作者の第二の人格である云ふ事である。作品は作者から分派した映像である。故に影は物體なくして存在し得ない。又影は光なくして存在し得ない。其處に作者が如何に光を把握するか問題となり價值が此處で決定される。光は眞理であつた。光は絶對であり、一切世界を創造する根元でもあつた。光に刺戟され物體を通じて映像が産み出される。其處に之等三者の緊密な關係が生ずる。

かくして創られて行つたものが藝術である。文藝は物自體であり、光自體でもあらねばならない。それであつてこそ永遠に古くして永遠に新しき絶對の生命と價值が考へ得られるのである。

偉大な藝術家は偉大な宗教家でもある。宗教を體認する事それ自身が藝術でもあつた。眞、善、美、聖は結局光そのものであり、一切現象自體でもあり、必然的に融合されてゐるものである。鎌倉時代の文藝は所謂文學家のそれではなかつた。眞に人生を憐み、光を求め、自己の中に一切の矛盾を世界を包含し得た、かの宗教的天才としての聖者法然、日蓮、親鸞等の口傳、法語、著書こそ眞の文學的藝術そのものであつた。

此處よりして眞の意味の文藝なるものは作者自身であり、眞理そのものであること云ふ事が可能なる。而し、反面眞理なるものは唯一にして絶對である。故に文學は聖なる眞理を眞、善、美の價值を通じて、又文字なる道具を用ひて表現された所謂作物に外ならない。結局、文學は種々の立場に立脚して眞理を反映せるものである。こゝに於てその多様性を認め得るのである。

而し一個の作品は單獨に存在されない。それは社會的、時代的、個人的相互關係に於て始めて成立されるものであり、常にそれらの支配下に從屬するものである。此の限界内に於て如何に生命を發揮したか云ふ事が、その作品の獨自性ともなつて輝き得るのである。

例へば法然上人の選擇集は往生要集を待たねば出現しなかつたかも知れず、又上人は奈良朝の、あの時代に於て出現し得たか云ふ事その事は實に、時代的產出としての必然性を獨自の境としての生命が流れてゐる事を意味するのである。

茲に我々は實に微妙なものではあるが時代的背景と社會的制約を離れて一切の事は考察され得ないのである。

#### 四

我が邦、文學史の發展は、現代へ通ずる過程として實に大きな暗黒面を持たねばならなかつた。特に鎌倉末期から徳川時代へかけての三百年間は戰亂斷つ事なく、世事いよく多事にして人心は荒み、文書に親む暇すらなく、平安朝に咲いた文化の華は漸くにして下り坂を辿りつゝあつた。

此の時近世への橋渡しとしてよく務を全し、自己の世界を開墾して行つた者は實に僧侶にして、特に五山を中心とする禪僧の面目は遠く支那の有識者をして驚嘆せしめるものがあつた。彼等は宗教生活と同時に文學生活の兩面をよく一身に體得し、美々しき一時代を劃するに至つた。前に私は偉大なる藝術家は偉大なる宗教家であり、宗教的境地の表現そのものがこりもなほさず偉大な藝術であること云つた。此の事は實に五山文學と其の禪僧の上に就いて適切なものである。

而し茲に疑問となるのは、僧侶は宗教家である。である故に文學の如き他界に走るのは既に墮落を意味するものではないか。又文學に於て偉大になり得ても結局宗教を忘失するものではないか。或は二兎を追ふ者は一兎を得ずの道理によつて、窮極に於てそれは合致し得ざるものではないか。等こと云ふ事である。私は此の問題を自己の課題として現在も悩みつゝある事である。故に之は私自身の悩であると同時に一般的な苦痛ではないかと察知する。其處で此のよき一例としての五山文學を考求する事により微かではあるが希望を取り戻したいと考へる。

#### 五

シヨペンハウエルは「宗教は螢の如し、光明を放つが爲に暗黒を要す」と云つてゐるが適切な語であると思ふ。國亂れて忠臣顯れ來る如く世の衰頹は超人を必要とする。即ち救世すべき超人が要求せられる處に必然的に超人は產出されるのである。事實五山文學時代もかゝる社會狀態の險惡性に富んだ時代でもあつた。

武家政治はその根本に於て既に變態的である。之も時代の産んだ畸型と云へば云へぬ事もなく、たしかに一時的な形態であり、又あるべきものであつた。處が事實をうでなかつた處に時代の暗黒面が覗き得られる。當時の政治は成文律でなかつた爲に曖昧性に富んでおり、此の曖昧性が源氏三代で亡ぶべき武家政治をして徳川時代に迄延引せしめたのである。即ち一般常識としても、又根本的絶對的な大義名分に照合しても許されざる此の種の政治形態は當時にあつても勿論平常的なものではなく、公家に於ても遠からずして當然返還さるべきものとしての見解が根強かつた。

畸型政態を固持せんとする者こそそれに反對するものの溝は既に暗黒的世相を一層純粹化した。後者の信念は何時しか全面的のものとなつて志ある者の血を刺戟し遂に建武の中興となつて具體化されてゐる。之は失敗に歸したが兎も角此の兩面の中間に立つて地方政治は相當に混亂を生じ、幕府の勢力の衰微と共に、平民の擡頭を促し、それが足利中期に入つては下剋上と云つた有様を如實に出現せしむるに至つてゐる。

此の錯綜は最も忌避すべきものであるが、而し此の試練は國民に取つて相當力強い所謂日本精神の養育の場所となり、それはやがて來るべき美しき黎明を約束するものであつた。

此の時代の暗黒を現出する第一原因である政治的缺陷は人をして自己防衛に走らしめ、人々は武装を強固にする事に専心し、世は下りさまに流れてゐた。茲に獨り立つて精神的奥地に邁進し力に變へるに筆を以てしたのは僧侶であつた。暗黒を必要とする宗教は、鎌倉時代に早宗教的偉人を多々產出したが、その後の暗黒を照し自己の光を微かに燒き續けた螢は云ふ迄もなく五山の僧侶の一群であつたのである。

## 六

而らば通常五山文學と呼ばれてゐるものは果して何れを指して云々するのであらうか。

那波利貞氏はその五山文學論の中に「五山文學とは鎌倉末期より足利時代を通じて臨濟の五山の僧侶輩の手に依り發達せしめられたる支那純文學及び廣義に於ける支那文學の總稱である」と云はれてゐる。

之によつて知り得られる所は、支那に於て盛大を極めた純文學が我國に輸入され、それが五山の僧侶によつて大成され、體認されたこと云ふ事である。今少しく詳言するに、元朝に歸化して來た一寧一山によつて開かれたもので、彼の歸化と彼の持つてゐる詩的境地は當時の學僧の詩想を刺戟し、それらをして支那純粹詩の作製に熱中せしめたのである。

一寧一山は本名を胡一寧と謂ひ支那有數の儒學者であり、併せて九流諸子の學にも貫通し書道も巧みであつた。彼が平安末期から衰頽に歸せんとし、汎論せる文壇に支那純文學を流し込んだのである。之に傾註し大いに此の新文化材の傳播と體認に務めたのが五山の僧侶達でありその最初の完成者は雪村友梅で、彼は一ち早く僧侶的俗臭から脱却し金糸玉條の所謂支那純詩文を成し得たのである。

## 七

光を求め而も光を放つた此の一群は理想を奈邊に持ち、何處に着眼點を持つて居たのであらうか。それは云ふ迄もなく此の新文化の咀嚼であり、佛教を通じ、而もそれを超越して支那純文學の詩文を製作する事であつた。彼等は儒佛を併合せる彼岸を憧憬し、常にそれに向つて努力し、遂にはそれを完成して我國文學史の一期を後世にまで輝かしたのである。詩を作りては自己の不才を忘れ、方丈に萬松の響を聽いた彼等であつた。

宗教的境と文學的境は茲に於て完全に融合されてしまつてゐる。彼等は社會的良心となつて社會の誘導者となり、獨自の文學思想を後世に残した。此の能文にして能詩の達者は實にすばらしく輩出してゐるが、その中に於ても特に、虎關、義堂、中嚴は文に於て傑出し、絶海、村庵、桂庵は詩に於て他に卓越してゐる。

此の様にその殆んど總てが全力を擧げて、熱中したのであるが、多くは未だ日本流たるを脱れ得ず、又よし脱れ得てもその内容、表現形式に於て僧侶的臭みの紛々たるものであり純文藝としての系統は確立されてゐなかつた。其の中義堂、絶海の如きは當時文壇の雙星であり最高峰に位置する者であつた。

## 八

義堂は土佐の出身であり、空華集の著者で、南禪寺慈氏院の第一世であり、名を周信と云ひ、義堂は號であり、又自ら空華道人とも號した。年十四にして叡山に上り、登壇受戒し、後故郷にて密教を學び、十七歳の時上京して夢窓國師に師事し、後鎌倉の圓覺寺に住したが義滿の勸誘により京都に歸り建仁寺に住した。後旨を奉じ南禪寺に遷り、慈氏院に退休した。南禪寺は五山の至上であつた。六十四歳にて壽を全うし、法臘は五十年を數へてゐる。彼の代表作は空華集であるが、彼の最も憧憬してゐたのは宋の明教大師の學德にあつたやうである。彼は常に大師の畫像を壁に掲げて禮拜し、又大師の著作たる鐔津文集を何人たるを問はず推賞したと云ふ事によつてその熱誠の如何程であつたかを知る事が出来る。又彼の詩を讚美して空華集の序に

禪文偕熟。餘力學詩。最於老杜老坡二集。讀之稔焉。而醞釀於胸中既久矣。時或感物。興發而作則。雄壯健峻。幽遠古淡。高之如山嶽。深之如河海。明之如日月。冥之如鬼神。其變化。如風雲雷電。其珍奇。如珠貝金璧。以至其縱逸橫放。則如獵虎豹熊羆之猛然。

こあるを以て見てもその詩文の優秀なる事が合點されるのであり、又彼の社會的地位は、主上高神の師であり、歌會等に於ては常に彼が師範であつた。彼が臨終迫るに聞召され後光嚴上皇は近臣をしてその安を問はしめられた程である。彼は渡明はしなかつたけれども彼の詩は支那の詩人をして日本に此の如き郎あらんとは讀詞を吝ましめなかつた程である。

## 九

義堂は絶海と同じく土佐の出身であり、年は絶海よりも十二歳後れてゐる。而し兩者の友誼最も厚く、彼も夢窓國師の室に入り勉強したのである。名を中津に云ひ絶海は號であり、別して白蕉堅道人とも號しており、藤原氏の出である。十八歳の時建仁寺に往き義堂と友情を交はし卅三歳の時佐汝霖と共に支那に遊學し、後歸朝し相國寺に位し七十にして去り僧臘は五十六歳であつた。

後圓融天皇勅を以て佛智廣照國師と諡し、又後小松天皇續いて淨印翊聖の四字を加諡せられた。著書は蕉堅稿の外に語錄即ち絶海錄あり。遺偈に

虚空落地。火星亂飛。倒打筋斗。抹過鐵圍。こあり又

日本絶海禪師之於詩。亦善鳴者也。來中國求道。暇則講乎詩文。禪師得詩之體裁。清婉峭雅。出於性情之正。雖音唐休徹之輩。亦弗能過之也。噫爲禪師之後。有尙於詩者。當以禪師爲法。慎毋効留連光景。取快於一時。

ミ序文にあり、義堂に勝ることも劣らざる詩境と表現形式とを持ち、支那人でなくしては歌ひ切れない美灑の境地を開墾してゐる。

明の大祖にも謁し唱和詩を賜はつてゐる。彼は實に支那文藝に對してはその能力行くに障害なく一つとして歌ひ切れ

なかつたものはなかつた。又詩のみではなく純支那風の楷書の奥義を會得してゐたものゝやうである。義堂よりも本場仕込みであつた丈に、その境も從つて洗練され、其の偉名も日支兩國に冠たるものであつた。

## 十

五山文學の精髓特に詩は雪村友梅より本格的に發展し來り義堂、絶海によつて最高潮に到達し噫爲禪師之後有尙於詩者ある如く、其の豫言は適中して彼等以後は漸次、人材に事缺くやうになり、衰微の過程を迎るやうになつた。而し此の詩文隆盛時代は去つたが之に變つて註疏の隆盛時代を次期に劃してゐる。詩文の衰頹の原因は一は明の時代を去てからは支那に於ても詩の指導的立場に立つ人材が絶へて行つたのもあらう。而し一方に於ては五山僧侶は漸次政治的、外交的方面に進出するやうになり、その學も多岐に亘り結局詩の方は趣味程度のものに迄下けられて行つたからである。故に、此の後期に於ては、詩よりも先づ政治的才力が重點をなしたやうである。

此の後期即ち應永を境としての以降の註疏の代表者は太岳周崇であつた。彼は義滿の信任を得専ら註疏に自己を捧け、彼の翰苑遺芳は蘇東坡の詩を抄録したものである。

次に瑞溪周鳳は臥雲日件録を著し、註疏の黄金時代を現出するに至つてゐる。外交的に見ても内的に見ても當時は義政の時代であり東山文化も爛熟に達した時であつた。天龍寺船は日明交通に益々盛大を加へて、その外交的手腕は五山の僧侶の手になるもの多く、全く此の外交から五山の僧侶の功績を離しては考へ得られぬ迄になつてゐる。

之の功績はやがて徳川時代の儒教勃興の素因に迄なつており、特筆すべきものである。

又史學研究に於ても愚管抄、神皇正統記等を産んでゐる。慈圓は愚管抄は歴史哲學であり、人生觀でもあり、日本史七代區分法の創說である。此の點よりして北畠親房の神皇正統記の大義名分が時代的產物であり、それが我國民道德の



基調を發揮せる點に價值を有してゐるのであるが、前者は學の見地より見て特に傾注せねばならぬものである。

## 十一

以上に於て五山文學の價值、内容を概觀したのであるが更に之を前時代との關係、及び後世への連結に就いて一考して見たい。

奈良朝末より平安朝へかけての支那文學への憧憬の所産として發達した漢學は大體、平安期の貴族の手によつて大成されてゐるのであるが、之は眞に體得した云ふ域に迄達して居らず所謂模倣の範圍に止まつてゐたのである。彼の空海等によつて高揚されてゐる支那的文作に於ては相當に根強い力作である。其の點に於て徳川期の追従を許さないものが存するが、之も支那文化直接輸入の時期に止まり遣唐使派遣の中止によつてその文化が土着のものとなり、消化され切らない日本風のぎこちなさを發揮し結局我が國獨自のものとして體得され切らなかつた。其處に於て此の期は先づ創生期と云ふべくして、後世への端緒を起したに過ぎなくなつてしまつてゐる。

## 十二

徳川時代に於て五山の影響と直接的な支那との接觸によつて生じた儒學者の詩文は、量的に云つて殆んき天下を風靡するに至り、その餘力は現代に迄微かではあるが持ち續けられてゐるが、それは實の見地に立つて前二者に追従する程のものでないのである。

## 十三

五山文學は結局明との交通の刺激によつて發生したのであるが、今一度我國文化史上より之を考察して見るに、鎌倉武士の眞情に深く一致し得たものは禪宗であり、それは、ひいては室町時代迄も密接に關係し得たのである。禪宗はもろゝ個人的解脱を強調するものであり、其處に於て武士階級の主従關係の如き、又所謂武士道なるものゝ趣味風向に一致し、平民的な淨土教、日蓮宗が深く民衆に食入り宗教一揆をまで引き起すに至つてゐても、やはり地盤として禪風は支配階級に屬してゐたのである。

次に文藝的に云へば、鎌倉初期に於ては素朴なむしろ單調な武藝が尊重されてゐたのであるが、之も實朝の如き歌人の出現等に依つて文化的中心が次第に逆展りをして公家的になり、その嗜好も益々高次化し、室町幕府が京都におかれてからは本格的に武士は都會人の面を出すに至り、義政時代の所謂東山文化の現出によつて、それが表面的な、又一時的な薄水の上に成つた大殿堂であつたにしても、文化的興味の中心は宗教に於て、又建築、音樂、繪畫等の上に於ても著るしく素朴さを去つて、複雑性を加へるに至つた。

之が宋明の支那文化の輸入に伴なひ進行し、必然的に五山文學を産出すべき素地となつたのである。

#### 十四

前にも一言した如く、五山文學は一面、足利幕府の御用學者の觀を呈するに至り、従つて此の幕府とは親密を多分に含んでゐる。約言するに、禪宗と武士との關係に於て、又その關係から來る社會的地位に於て相當高度なものであつたのである。即ち、支配階級に依存し政治的な動向すら持つに至り、遂には五山の僧の文筆あるによつて明との交通を成功させ、それによつて我國の文化が推進したやうにも見られるのである。

#### 十五

最後に當つて、私は最初に自己に與へた疑問を解結せねばならない。而し之は結局五山文學の特色を述べる事によつて満足される問題と思ふ。よつて私は此の疑問を疑問としつゝその解結に向ひたいと思ふ。

時代的動向の產物としての五山文學に就いては今更多言を要しないのであるが、唯、彼等が單に幕府の御用學者である云ふ事に満足しなかつた云ふ事を考へて見たい。即ち、彼等はそれに満足する事なく自己の欲求と理想と着眼に向つて少しも吝かではなく、自己の途を眞直に切り開いて行つたのであつた。茲に彼等は文學的に偉大となり得たのである。果たして彼等は文學的に偉大であつたやうに宗教的に偉大であり得たか、又宗教を忘失するやうな事はなかつたか。茲で考へねばならぬ事は、文學と宗教の關係である。文學は作家の反映であり眞理そのものであると私は最初に云つた。茲よりして、眞の文學は一個の世界であり、眞理そのものである。今五山文學に就いて云へば、義堂の詩は單なる趣味ではなかつた。彼の作品は現在我々が讀んでもその境地は美しいものに感ぜられる。而るに若しそれが俗臭紛々たる氣まぐれな作品であつたなら果して六百年の歳月を過た今日迄その餘香を保ち得たであらうか。少くも義堂の詩が徳川期を通じて現代人にまで感激せしめ得たこと、それは當然純文であり永遠に古くして永遠に新らしき眞理を表現し彼はそれを體得してゐたこと云はねばならない。茲よりして義堂の詩は遂に眞理そのものであり彼自身であり又偉大藝術であつた。眞理を體認する事それ自身が宗教である。故に義堂は立派に宗教的境地を體認したと言はねばならない。再んや當時の禪宗の第一人者である事に於ておやである。又宗教を體認した人が、文學に於て成功したから云つてそれは到底墮落ではあり得ない。又偉大なる藝術家はそのまゝが偉大なる宗教家である。故に、文學宗教は兩者共に融然と合一され得るものである。

いさゝか我田引水に過ぎた嫌があるかもしれないが、私は今一つの重大な問題を解答せねばならない。それは、五山の僧侶の一群が、あまりにも支那に憧憬を懷き過ぎて所謂外國かぶれをしてゐるのではあるまいか。此の問題は相當に

強いのであつて一言にして答へ得られない。故に唯私は一つの辯解を残して諸賢の判斷を待ちたい。

以上に於て大體時代五山文學を述べたが、考へるにあの時代に於て即ち基調としての世態のよく整はざる時代暗黒面に會して文化史上に遺功し得たのは以て尊しませねばならない。何故なら反面彼等は正直に云ふ心粹し過ぎたかもしれない。而し文化は水と同様高きより底きに流れ込むものである。我が國は當時支那文化を仰がねばならなかつたのである。而して彼等は單に奴隸的に支那文化を信受したのではなかつた。かへつて彼等の出現によつて支那人をして日本人の才能を再認識せしめ、而も外交的になつても彼等なかりせば義滿をしてまだ下劣な奴隸にしてゐたかもしれない。即ち彼等は外交に於て功を積ね而も我國文化史上に大きな足跡を残した。以て偉く成すべく、苟しくも外國文化に憧憬したから云つて之を排斥し、非難すべきではあるまいと考へる。

兎に角、永遠に古くして永久に變らずして常に新鮮なる眞理は、自己の惱み彼岸の光を求める事であり宗教は勿論藝術一般の任務である。あゝ偉なる哉五山の僧侶よ私は云ひたい。文化の尖端に戦ひし偉なる五山の僧侶は偉なる宗教家であり、偉なる人間自體であつたのである。